松本市中　松本市高　松本美須々ケ丘

野球部創部70年記念号

2015年10月発行

発行者責任者／松本美須々ケ丘高校野球部OB会長　小林磨史
勤務(ホテルニューステーション)Tel　0263-35-3850　Fax　0263-35-3851
E-mail　kobayashi@hotel-ns.co.jp　携帯　090-3143-4085

三度目の甲子園出場をめざして！

松本美須々ケ丘高校野球部OB会の皆様、こんにちは。OB会長の小林と申します。

先日、平成27年6月27日（土）松本東急REYホテルにおいて、本会の総会があり、引き続いて創部70年記念式典が盛大に開催されましたことを先ずもってご報告申し上げます。

参加された皆様には、ご多用中のところ本当にありがとうございました。

今年は戦後70年、母校野球部の創部70年とも重なり、式典当日は、スライドで昔懐かしい先輩方の活躍の様子を映写し、高校野球を通じて戦後の復興の歴史を振り返ることも叶いました。

今から20年前の平成7年9月に発行された創部50年記念誌『甲子園はるか』には、創部5か月にして見事甲子園出場の夢を叶えた先輩諸氏の武勇伝が、当時の社会背景とともに綴られています。

本紙では、50年記念誌から、母校野球部の歴史と、盛会であった式典当日の模様を何枚かの写真を交えご紹介させていただき、野球部創部70年の報告とさせて頂きます。

創部50年の記念誌は、藤田繁先輩が編集長となり、数名の委員と協力し、様々な資料を基に完成させたものです。以降、記念誌より抜粋し、当時の様子を私なりにまとめてみました。

敗戦直後の食糧難、物資不足の中、昭和21年1月、全国中等学校野球大会が復活した。球児たちの甲子園への夢が繋がった瞬間である。

松本市内では、前年の昭和20年暮れに松本商業、松本中学（現深志高）の野球部が復活、春には松本二中（現県ヶ丘高）、松本工業に野球部が創設された。

わが松本市立中学（現美須々ケ丘高）は、21年春、クラス対抗の野球大会が契機となって、同4月に有志（浅川明先輩・丸山茂夫先輩）が、当時野球に理解のあった田中校長に硬式野球部の創設をお願いし快諾を得たと記されている。

市中時代の校舎（S16.4.～S.22.6.）

市高時代の校舎（S23.8.～S.24.11.焼失）

野球部創設の苦労は大変なもので、ユニフォームは勿論、道具類もなく、部員が自前で調達し、練習は松本城の石ころだらけの前庭で開始したとある。

最初の練習試合は4月末の松本商業戦。ユニフォームは市内の片倉製糸チームから借り、胸のマークが見えないよう裏返して着用、ベルトは落下傘用のひもを代用したそうだ。同窓生有志が試合前夜「新鋭市中、古豪松商と激突」というポスターを百枚作り、部員総出で市内に張りめぐらせた。試合結果は激突でなく「一蹴」であった。サインも作戦もなく、何と2対32で完敗。

この屈辱に、一時野球部は解散の危機まで行ったが、先生や級友に励まされ練習再開。

翌5月半ばの第2戦目、松工戦では18対6で初勝利を収める。この頃、熱心な父兄の中から野球部後援会が誕生し、待望のユニフォームが完成。胸に「MMM」Matsumoto Municipal Middle School（松本市立中学の頭文字）3つのMが晴れがましく印され、気勢は一気に高揚した。と、ある。

5月終盤から市内5校（松中・松商・松高・松工・本校）によるリーグ戦が開催され、2度目の松商戦は、12対20で敗戦。但し、7回まで10対10の同点で自信をつかんだようだ。

6月初め、良き指導者による組織的な指導を仰ぐべく各方面にお願いしたところ、松商野球部OBの胡桃沢（西沢）氏を監督に迎えることができ、学校の特別の計らいで校舎の一部を合宿所として、いよいよ本格的な猛練習に取り組むこととなり、父兄による寄付金集めも始まった。

7月25日からの戦後復活第一回全国中等学校野球大会（甲子園大会）に備えた練習試合では、大町・伊那・長野へ遠征、連戦連勝で更に自信をつけ、いよいよ長野県予選大会が開幕。

終戦から約一年、未だ食うに食なく、被服にも不自由した当時の観客席は、戦闘帽子や裸で観戦する者もあったが、何はなくても平和と自由を満喫し、唯一の娯楽でもあった中等野球に酔いしれた。

この時の県営球場は、バックネットや外野フェンスが戦時中で撤去されており、急遽丸太に網を張ったバックネット、外野も丸太に縄を張り巡らせた応急のもの、観客は土手に座って観戦した。

初戦の松工とは3対1で勝利。2回戦は長商と16対8、準々決勝は長中（現長野高校）に6対4、準決勝は松中とで16対4。念願の決勝進出で信越大会への出場権を獲得。決勝戦の相手は予想通り松本商業であった。

3度目の正直と臨んだ松商戦であったが、結果は8対3で敗戦。何と8回本校の放棄試合?で松商が優勝。この試合が先輩たちの野球魂に火をつけた。

記念誌には「何という試合か、8回まで本校が8対3でリードしていたが、9回表松商の攻撃で3点を与え8対6、なお2死満塁。このとき相沢投手にボークの判定でトラブルが発生。応援団、観客もグランドへ雪崩れ込んで試合続行不能となり、遂に審判から試合中止が宣告された」熊谷郁男（旧姓相沢）先輩の手記では、「9回の松商の攻撃は、8対6でなお2死満塁、1打逆転のピンチが続いた。相沢投手が投球動作に入ったとき、3塁側スタンドからファールボールがグランドに投げ返された。3塁の塁審はこのボールを早く片付けるよう

相沢投手投球フォーム

S21　試合前のキャッチボール

S21．51連隊兵器庫を改造した合宿所

丸太と葦のダッグアウト

S21.信越大会優勝

右は相沢投手と藤田捕手

満員の県営野球場

ボールボーイに手を振って合図した。これをタイムがかかったと勘違いした相沢は、投球動作を途中でやめ、主審は直ちにボークを宣告した。3塁走者は生還し1点差、なお2、3塁と逆転のピンチ。この判定に収まらない松本市中の応援団がグランドに雪崩れ込み、主審に抗議。松商応援団もこれに応酬し、球場は大混乱。後に全国中等学校野球連盟から出た裁定は、松本市中の放棄試合で9対0、松商の勝利というものだった」と、解説している。

信越大会には、長野県から松商と本校が、新潟県は新潟中学と柏崎中学が出場。8月3日、松商が柏中に20対3、本校が新中に11対4で勝利。決勝は再び本校と松商との決戦となった。8月4日、長野県予選決勝ではボーク判定で中止となった因縁の対決とあって、両校の応援団や一般市民で県営球場は超満員、異様な雰囲気となった。

試合は追いつ追われつのシーソーゲーム、結局10対7で本校、松本市立中に栄冠が輝いた。

森球審の戦評によれば、攻撃力では松商に部があったが、松本市中の打力を抑える投手力が不足。松商守備陣にエラーが続出し、攻めも消極的で松商が自滅した。とのことだった。

勝った！　遂に勝った！　宿敵松本商業を倒し、創部から5か月で夢の全国大会への道が開かれた。胡桃沢監督の指導、学校、生徒、後援会の支援、団結。選手は一戦毎に力をつけ、成し得た結果。よくぞここまでと、感激あるのみ…。

戦前から通算28回、戦後復活第一回の全国大会は、阪急西宮球場で開催された。甲子園は米軍の占領下で使用できなかった。全国745校からの代表19校が勝ち上がった。各校後援会が食料調達に四苦八苦した大会でもあった。宿舎は大半の学校が関西学院の寮、持ち寄った食糧を共同で自炊した。

本校は2回戦から登場、相手は四国代表城東中学、結果は7対2で勝利、3回戦準々決勝に進出。3回戦の相手は東京高付中。残念無念。9回逆転され、2対3で惜しくも敗戦。この仇は後輩にと念じ、涙涙で西宮球場に別れを告げた。と、悔しさいっぱいに綴られている。

夏の全国大会準々決勝敗退の傷心を癒す間もなく、8月23日から松本市主催で近県中等学校招待野球大会が開催された。

出場校は、中京商業（愛知県）沼津中学（静岡県）都立一中（東京都）新潟中学（新潟県）甲府中学（山梨県）岐阜第一工業（岐阜県）松本市立中学（長野県イ）松本商業（長野県ロ）の八校。

本校は、一回戦で岐阜工に9対1、準決勝で都立一中に9対4で勝利し、決勝は同県の松商と5度目の対戦となった。

結果は10対8で本校が勝ち、信越代表校としての面目を保った。

思えば松商という好敵手がいたからこそ、打倒松商を合言葉にこれだけの成果を挙げることができ、松商OBの胡桃沢（西沢）監督を迎えて育ててくれた恩義は肝に銘じておかなければならない。

十一月の第一回国民体育大会（京都府）には、夏の全国大会の実績が認められ長野県代表として参加。中等野球部門は藤井寺球場で行われ、本校は夏の優勝校浪華商業と対戦。あわよくば一泡吹かせようと目論んだが、6対1。さすがに強かった。この試合を最後に昭和21年度の全試合を終了した。

栄えある全国大会出場メンバーは、部長　柴韓治郎先生、監督　西沢清氏、マネージャー　丸山茂夫⑤（5年）、同　中田武夫⑤、投手　相沢資宏⑤、捕手　藤田繁⑤、1塁手　平野義一⑤、2塁手　守田豊治⑤、3塁手　相沢郁男⑤、遊撃手　浅川明⑤、左翼手　堀国夫⑤、中堅手　小原修⑤、右翼手　平野幸男③、補欠　清沢平④、小原啓④、野口健④、小森光生③。

二回目の全国大会出場は、昭和24年度のメンバーによるものですが、昭和22・23年の活躍も見逃せませんので、少し触れることにします。

昭和22年度は、全国大会で活躍した5年生が卒業し、レギュラーで残ったのは平野幸男氏のみ。文字通り一からのチーム作りだった。相変わらずの食糧不足と、道具も不足しており苦労した。

その中、長野県大会では、長野市中、伊北農を破り、準決勝で野沢中を5対0、決勝戦は松本中（現深志）を延長14回、3対0で破り優勝した。

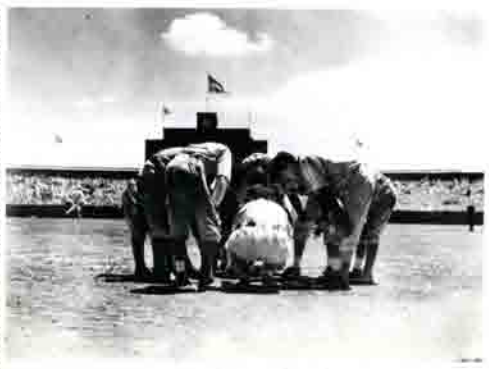
全国大会出場を懸けた北信越大会は、長野県から松本市中と松本中、新潟県から新潟商業と柏崎中の4校で争った。本校は初戦で柏崎中に4対1で勝利し、決勝は再度松本中との戦いとなった。何と延長23回、地方大会新記録だったが、残念ながら松本中に2対4で敗れた。この年は松本中が栄えある全国大会に進んだ。

翌23年、戦後3年目で学制改革があり、松本市中は市内の2中学と合併、松本市立高等学校となった。この年も食糧・物資不足が続き、合宿所は滝沢マネージャーの自宅の一部を開放して戴いた。

戦績の方は、中信地区予選を勝ち抜き、県大会では長野北高を1回戦で、2回戦では松本深志を破り、準決勝で県ヶ丘に9対2、決勝戦では穂高農に4対0で勝利し、県大会

全国大会へ向かい街中を駅へ入場行進をする松本市中

松本駅での見送り大阪へ向かう満員の阪急西宮球場


S21. 8. 19. 対東京高師付中戦ベンチ前

前夜宿舎での作戦会議

S22. 23. 県大会優勝旗

S23. 松本市高となり胸のマークも松高に

2連覇。信越大会には、本校と穂高農、新潟勢は新潟高校に新潟工業が進んだ。

松本市高は初戦で新潟高を4対3で撃破、決勝は穂高農と再戦、誠に残念な結果となり4対5で破れ、穂高農業高校が全国大会出場の栄誉を手にした。

本校二度目の全国大会出場は、昭和24年度であった。

この年の北信越大会県予選の決勝は、中信予選2試合と県大会3試合を全て完封勝利で制した大会屈指の好投手、手塚率いる松本市高。そして、それに勝るとも劣らぬ好投手、宮川率いる長野北高との間で争われた。

松本市高14安打、一方の長野北は3安打。結果は、3対2で本校が勝利するわけだが、長野北宮川投手の粘り強い好投が光った試合だった。

北信越大会は、長野県から本校と長野北、新潟県からは柏崎高と長岡高の4校で甲子園行きの切符を争うこととなった。本校は準決勝で柏崎高を13対4の大差で退け、決勝戦は再度長野北との戦いとなった。

松本城の狭い場所で練習、現在の博物館前

決勝戦は、長野北が初回に2点を先行、本校が2回と7回に1点づつ返す好ゲーム。手塚と宮川の投手戦は、本校が8回に積極打法で2点を挙げ決着、二度目の栄誉を手に入れた。両軍美技の繰り返しで稀にみる好試合であった。

松本市高は22・23年と連続で県大会に優勝しながら、信越大会決勝で22年は深志に、23年は穂高農業に敗れた苦い経験を持つだけに今回の勝利はひときわ喜び深いものとなった。

S24. 8.13. 第31回全国高等学校野球選手権大会（甲子園球場）

攻・走・守3拍子揃った市高ナインは、この様に紹介された。投手団は主戦の手塚のほかに小森と左の伊藤がいる。甲子園では手塚がプレートを譲ることはないだろう。手塚は6尺の巨体からアンダースローがかったサイドスローの一風変わったモーションで浮き気味のシュートを投げる。これが内角をすれすれに出たり入ったり、或いは極め球となり釣り球となって打者を惑わす。ほかに外角の重い速球とアウト・ドロップ、県下では打ちこなす高校生はいないと言ってもいい。小森は伸びのある速球を度胸で投げ込む剛球投手、伊藤は緩いイン・ドロを持つ左腕投手で相当の腕前だか、エースの手塚の陰の人となっている。守備では、女房役の捕手野口は主将で、

超満員の甲子園球場

闘志といい肩といい県下随一左で器用な一塁伊藤、二塁飯野は小柄だがリスのように動く。内野陣の花形は何と言っても三塁小森。野球選手として典型的な体格をもち、その強肩は全国的にも類がない。遊撃の北原は派手さはないが横も正面も強い。この内野陣に対し、山川を真中に半田、降旗の外野陣は揃って足が速くここにも穴は見当たらない。

打撃は野口、小森、手塚が中心。特に小森のバッティングはよく振り切れ腰も入っている、外角のボールを左翼に運ぶ強引さもあるがカーブに対する打法も心得ている。

ナインはそろって俊足で盗塁が多い。守備で敵に3点以上与えたことはない。粗雑だと言われた試合運びも、長野北高との対戦で抜け目なくなってきている。全国大会では、一流の投手と守備陣で信越旋風を吹かせてもらいたい。

全国高校野球信越代表、松本市高ナインは8月10日朝7時10分松本駅発の列車で甲子園に向かった。駅ホームは校友、市、体協などの関係者で埋まり、野口主将が「学生らしく力いっぱい戦ってきます」と応えた。

甲子園の第一戦は不戦勝、4日目の第一試合で北陸代表の武生高と東九州代表臼杵高の勝者と対戦することとなった。

試合は予想通り優勝候補の臼杵高が勝利し、本校の甲子園初戦の相手は決まった。

勝目は6分と言われた本校と臼杵高試合は、相手が7回に1点、本校は9回に小森の長打で追いつき延長戦に突入。11回に臼杵が2・3塁のチャンスをスクイズ失敗で逃すと、12回は小森が再度3塁打、伊藤のスクイズが前進した3塁手の頭上を越え決勝点が入って勝利。但し、市高の下位打線の不調が心配された。

次の3回戦は準々決勝、相手は神奈川県代表の湘南高。甲子園は内外野とも超満員の観衆を集め、松本市高が先攻で始まった。

6回に本校が1点先取も7回に同点とされる接戦。8回相手の無死1・2塁の攻撃を凌ぐが、9回ウラ1死後安打と盗塁で2進した走者を右前ヒットで返され、万事休す。

この年の全国大会決勝戦は岐阜高と湘南高で争われ、本校に勝利した湘南が全国優勝を果たした。湘南高は初出場初優勝、「無欲の勝利」と話題になった。

これ以降、残念ながらわが母校は全国大会出場までの戦績は上げられずにいます。

しかし、高校生活の殆どを野球と共に過ごした球友は、現在、住所が把握できているだけでも455名おり、その会友には毎年会報を発送し、後輩たちの支援をお願いしています。

私たち松本美須々ケ丘高校野球部OB会会員は、その前身の松本市中、松本市高時代の先輩が成し遂げた二度の全国大会出場の偉業を心から誇りに思い、いつの日も三度目の奇蹟を念じて止みません。

今回の式典に、昭和21年と24年の戦いを演じた大先輩をお迎えでき、お話をお伺いできたことは感無量でありました。先輩方に感謝し、益々のご健勝をお祈りしたいと思います。

また、当日ご多用中にもかかわらずご出席いただいたご来賓の皆様と、母校野球部保護者会の皆様に重ねて御礼を申し上げ、結びに現役諸君の精一杯の活躍を皆で祈り、今回の報告とさせていただきます。

ご協力いただきましたOB会役員の皆様、本当にありがとうございました。

（OB会長　小林磨史）

◆左の写真は、創部50年の式典で講演する小森先輩です。小森さんは今回の70年式典にはお越し頂けませんでしたが、昭和25年松本市高を卒業

後、早稲田大学に入学、野球部で活躍の後、２９年毎日オリオンズ入団、その後近鉄バッファローズに移籍、４１年近鉄コーチ、続いて広島カープ、ヤクルトスワローズ、大洋ホエールズでコーチを歴任し、昭和５９年ユニフォームを脱ぎますが、現役生活十二年、千試合出場、コーチで十七年、解説者で二年、計三一年をプロ野球の世界で過ごしました。

他にも高校卒業後、素晴らしい球歴を残されたＯＢがおられることを誇りに思います。

平成6年秋、神宮球場での小森光生氏
左は1年先輩の元近鉄岩本堯監督

創部70年式典と懇談会スナップ